

○ 取組の背景

- 志太榛原地域では、農地と宅地の混在化により、広範囲に点在した水田を耕作する**大規模稲作農家は生産効率が低下し、所得低下が問題**となっている。
- そこで、大規模稲作農家の所得向上を目的とし、①肥料価格高騰対策となる**「耕蜂連携」の取組**、②実需者と連携することで収益性が高まる**「ビール大麦」の生産拡大**、③作業分散に効果のある**「水稻乾田直播栽培」の安定化**を推進する。

○ 課題・目標

支出の削減

養蜂業者と連携した緑肥（レンゲ）栽培
「耕蜂連携」の手法による肥料代の削減

収入の向上

実需者ニーズに対応した
「ビール大麦」の生産拡大（水田高度利用）

作業分散に効果のある
「水稻乾田直播栽培」の安定化

大規模
稲作農家の
所得向上

普及指導員の活動

○ 推進方向 1 「耕蜂連携」の手法による肥料代の削減

■ モデル事例の企画調整

稲作農家と養蜂業者の連携に向けて、取組内容の企画・関係者との調整を行い、**モデル事例（有山本耕業×河村養蜂場）**を創出。

■ 稲作農家と養蜂業者のマッチング

取組拡大に向けて、**マッチング会**を開催し連携条件の調整と**マッチングを実施**。マッチング手順をマニュアル化した**マッチング体制を整備**。

■ ドローン播種実演会の実施

県内企業であるヤマハ発動機(株)に協力を依頼し、**レンゲのドローン播種実演会を実施**するなど情報発信を実施。

■ モデル田の調査

レンゲの窒素補給効果の調査、レンゲほ場（化学肥料不使用）と慣行ほ場における**水稻の生育・収量・食味等を比較**。



耕蜂連携マッチング会



ドローン播種実演会

○ 推進方向 2 実需者ニーズに対応した「ビール大麦」の生産拡大

■ 実需者（ガイアフロー(株)）の要望調査

求める数量や品質などの**実需者（ガイアフロー(株)）の要望を調査**。

■ 水田の作付体系別の収支予想

ビール大麦が儲かることを検証する**収支シミュレーションを実施**。

■ ビール大麦の生育調査・ほ場巡回指導

県内で未実施のビール大麦の**生育調査・ほ場巡回指導を実施**。



ビール大麦の生育調査

普及指導員の活動

○推進方向3 作業分散に効果のある「水稲乾田直播栽培」の安定化

■作業スケジュールの改善

生産者・JA大井川・農林事務所の3者による個別面談を実施し、各生産者の月別作業計画を作成・作業スケジュールを改善。

■ほ場巡回指導

適期作業が重要となる2月～5月にかけて、作業ポイントをまとめた資料を作成し、毎月1回生産者を交えたほ場巡回指導を実施。



播種作業

具体的な成果

○推進方向1 「耕蜂連携」の手法による肥料代の削減

■耕蜂連携の連携条件の決定・マッチングによる取組拡大

<決定した連携条件>



稲作農家

4月末までレング畑（採蜜場）と巣箱置場を提供



養蜂業者

安価（一般流通の半額程度）でレング種子を提供

・令和4年度は8.9ha（4市町）、令和5年度は18.8ha（5市町）で取組が実施された。

■取組結果

- ・肥料代は平均25%削減され、レングのハチミツは168kg採蜜された。
- ・レングのイネへの窒素補給効果は地域の化学肥料慣行基準と同程度の8.3kg/10aであった。
- ・レングほ場と慣行ほ場の収量はどちらも480kg/10aであり、食味スコアはレングほ場（87点）が慣行ほ場（80点）を上回った。



れんげ米とレングはちみつ

○推進方向2 実需者ニーズに対応した「ビール大麦」の生産拡大

■生産面積の拡大

・関係者が一同に会する大麦反省会において、実需者の要望調査の結果（県産大麦の需要量：現状の5倍程度）と大麦の収益性の高さを説明した結果、生産面積が10.9ha（令和4年産）から14.3ha（令和5年産）に拡大した。

■平均収量・取引数量の増加

- ・排水性の良いほ場の選定や麦踏みの改善等により、平均収量は403kg/10a（昨年比：157%）となった。
- ・等級検査は全量1等であり、取引数量は約58トンと昨年の約28トンから倍増した。



成熟期のビール大麦

○推進方向3 作業分散に効果のある「水稲乾田直播栽培」の安定化

■作業スケジュールの改善

・3月中に播種作業が終了し、作業分散につながった。また、適期に除草剤散布が実施でき、雑草害が低減した。

■栽培面積の拡大

・当地区における栽培技術の安定化が進むにつれて、新たな生産者が直播栽培を開始し、栽培面積も増加（R5産:54ha）している。

